

李靖・哪吒父子説話に関するの一考察

齊藤孝祐

はじめに

中国という地域はその長い歴史の中で実に多種多様な思想、文化を内包・発展させてきた。春秋戦国時代の諸子百家に始まり、後漢末期には五斗米道や太平道が成立し、その後も異民族移住によって多くの異文化・異宗教が流入している。その過程で、仏教神として中国に流入しつつも、後世、他の宗教に吸収され現代に伝わる神格も多数存在する。中でも哪吒太子という神は非常に人気が高く、台湾においては廟の数が多く、一〇〇ヶ所を超える。『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』（許仲琳編 明代 内閣文庫所蔵）（以下『封神』）や『西遊記』（吳承恩撰 三民書局 一九七二）（以下『西遊』）等の小説、並びに、現代では映像作品にもよく登場し、民衆にとって身近な神格である。哪吒太子の時代的変遷は二階堂善弘の『明清期における武神と神仙の発展』^{〔1〕}（関西大学出版部 二〇〇九）が詳しい。二階堂善弘はその「哪吒太子考」の中で、唐代に哪吒が中国に伝来してから、父神である毘沙門天から独立して道教、民間信仰や雑劇、法術・呪術の呪文などに取り入れられ、文学作品にも登場するようになることや、他の神格や宗教との説話の混同から、その変遷過程が複雑になっていることを指摘している。また、その変遷過程の中で哪吒の職能は除災

や闘争といったものを含むようになり、呪術方面の人氣が高いことを示唆した。しかし私はこの二点よりも重要な要素として「水」が挙げられると考える。

私は本論では、哪吒太子とその父李靖（毘沙門天、托塔李天王とも）の神格にまつわる宗教説話の時代的変遷と廟の地理的分布傾向の考察をしてみたい。従来の『封神』研究においての李靖像は、毘沙門天との習合に求める傾向にあるため、毘沙門天と李靖が習合していく過程等については既に言及されている。しかし一方、史実の人物としての李靖や、死後の李靖像研究は少ない。³しかしそれでは、『封神』において元仙人の人間として登場する李靖のルーツの説明が不足しているため、李靖という人物が死後、神格化されていく過程を明確にし、毘沙門天とは関連性なく付加された説話や、息子である哪吒との比較から、中国人の「水」への向き合い方と『封神』との関連について考察したい。

一 衛国公李靖の歴史的変遷について

『封神』では、哪吒の父親として登場する李靖であるが、彼は事実上の人物である。従来の『封神』研究では、毘沙門天と李靖が習合していく過程やその契機等が深く追及されているが、実在の人物としての李靖を研究する視点が希薄である。ここでは、李靖という人物が神格化されていく過程、職能などに考察をしてみたい。

李靖（五七一〜六四九）という人物は『旧唐書』第八卷によれば、唐・太宗の頃、衛国公の職に就いていた。⁵彼の字が「葉師」であることから、「葉師（yè-shī）」と「夜叉（yè-chā）」が混同され、夜叉を眷属として従える「夜叉の長」として知られる毘沙門天の、現世における人間としての呼称が「李夜叉」だとの誤解を受けた。このことが李靖と毘沙門天の習合の発端であるという説が一般的である。⁶しかし、毘沙門天と李靖が習合して托塔李天王へと派生

していく半面、事実上の李靖という人物は死後、時間の経過と共に単体の神として発展していく。

まず、宋代の資料『宋會要輯稿』禮二〇諸祠廟に見える李靖祭祀は、以下の通りである。

李靖祠。一在潞城縣，徽宗崇寧四年二月賜額「廣德」。一在解縣，大觀元年正月封忠烈王。二年封輔世惠烈王。又石晉封靈顯王，徽宗大觀元年十一月改封普世忠烈王。⁽⁸⁾

北宋期、このように李靖祭祀する際「忠烈王」、「輔世惠烈王」、「普世忠烈王」と号を改められ、より高位となつていく流れが見られる。その他『關中勝蹟圖志』卷七の地方志にもこの人物への祭祀記録がある。

李衛公祠。通志在三原縣治西。祀唐李靖。碑記、宋德祐初、封衛公、爲輔世靈祐王。元加忠顯威烈王、賜廟額曰仁濟。春秋致祭。⁽¹⁰⁾

これらの記事は、「李衛公」への祭祀を毎年春と秋の二回行っているという記録である。

それらとの関連で元代、民間信仰上の李靖には雨の神という性格が見える。『玉芝堂談薈』⁽¹¹⁾卷一九、『元明事類鈔』⁽¹²⁾卷二〇に見られる記事である。

李靖、微時獵山、会暮宿一朱門。夜半扣門甚急。主婦謂曰、今天命行雨、欲煩君命。蒼頭韞青驄馬取雨器。乃一小屏戒曰、馬鳴即以瓶水滴馬鬃上。此一滴乃地上三尺、慎勿多也。⁽¹³⁾

安吉州李衛公廟、宏治初歲旱、呂令輿神禱雨。雨隨輿。至後又旱。且酷熱。禱于神。神額有汗如珠、拭之復汗、雨亦隨應。⁽¹⁴⁾

この記事には、李靖という人物が貧しい頃、山に入って時に応じて雨を操作して見せたことや、李衛公廟の神像に祈ると、その祈りに応じて雨が降ったという伝承が明記されている。以上の事柄と、先に触れた『關中勝蹟圖志』⁽¹⁵⁾卷七の記事とを照らし合わせると、李靖の性質と雨・豊作との密接な関係があることがわかる。これは関中平野を含む陝西地方が、灌漑農業を行っていたことから、降雨を祈願する必要性があったためと思われる。以上のことから、李靖はその死後、各王朝からは武将として併祀される一方、少なくとも陝西地方においては降雨を願う信仰対象とされて

いたことがわかる。だが、文学においてはこれらとは多少異なる取り扱いをされていた。戯曲、雑劇を影印収録している『脉望館鈔本古今雜劇』⁽¹⁶⁾に見られる第一七〇「唐李靖陰山破虜（關名撰）」には、

老夫姓李名靖字藥師乃京兆三原人也⁽¹⁷⁾

李靖軍師統天兵之威用神術妙策征滅北番⁽¹⁸⁾

等の戯曲的説話がある。この物語中では、北方の異民族に対抗するために李靖が採った手段は天の兵と神術を利用することであり、まるで神仙のようであるという説話である。この作品がどの年代に成立したのかは断言できないが、少なくとも宋代から明代にかけて発展していた戯曲・雑劇の流れによつてであると考えられる。また、『封神』に登場する李靖は陳塘関（現在の広州の一部）の長官となる前は、仙人の修行をしていたという設定がある。⁽¹⁹⁾これは先の『玉苧堂談薈』⁽²⁰⁾巻十九、『元明事類鈔』⁽²¹⁾巻二〇『脉望館鈔本古今雜劇』⁽²²⁾第一七〇「唐李靖陰山破虜」に見られる山中での降雨説話、神術妙策説話がその素地にあると考えられる。つまり、『封神』においての李靖像には、これらの説話や雑劇を踏襲している部分が多く見受けられるのである。

この他、李靖への公的祭祀の記録もある。『明実録』⁽²³⁾洪武二十一年二月甲寅の条に次のような記録がある。

詔以歷代名臣從祀帝王廟先是禮官奏以（中略）太公望・方叔・召虎・張良・蕭何・曹參・周勃・鄧禹・諸葛亮・房玄齡・杜如晦・李靖・郭子儀・李晟・（中略）岳飛・張浚・木華黎・博爾忽・博爾木・赤老溫・伯顔。凡三十有七人從祀歷代帝王廟。⁽²⁴⁾

この記事は、明朝が国家祭祀で歴代王朝の皇帝を祀った際、從祀された諸臣の中に李靖が含まれていたことを示している。これは皇帝に仕えた歴代の家臣・武官を併せ祀る性質のものであるため、説話や文学的面からの李靖像とは異なるが、後述する台湾での李靖の取り扱いに近いものであるので、明示した。

以上のことから、李靖は唐代、国土の防衛の職に就いており、その死後は民間では宋代以後、降雨の信仰対象とされ、雨を自在に降らせたという説話が付加された。このことからその後は雑劇の中で神仙に準ずる扱いを受けるよう

になり、明代では王朝から武臣として併祀された他、『封神』に元道士の地方長官として登場する。つまり毘沙門天との習合後、托塔李天王となる部分以外の単体としての李靖像は、宋代・元代の降雨説話や神術妙策説話に見られるような神仙像だったのである。それが、『封神』においても部分的に踏襲されていると考えられる。一方、彼への公的祭祀の記録からは明王朝が李靖を武臣として扱っていたことがわかった。

二 中国文学に見る哪吒太子説話の変容

哪吒太子（以下哪吒）は初めインドの神として成立し仏教に取り入れられた²⁴。その後仏教の流入に伴い父神の毘沙門天と共に中国に流入し仏教説話、伝承、雜劇に登場するようになる。ここでは哪吒の神格の変遷、文学との関連を踏まえ、哪吒に見られる側面を論じてみたい。

哪吒という神格は、以前は「那叱」とも表記され、現在では主に道教神として有名である（図①を参照）。タンキーやフーチーという呪術面でも人気がある。一般には「太子爺」と称される他、「中壇元帥」、「太子元帥」、「哪吒三太子」とも呼ばれている。この神格が登場する明代・清代の作品としては、周の易姓革命に協力する仙人の一人としての活躍を描いた『封神』の他、孫悟空の好敵手として登場する『西遊』などが挙げられる。ここではこの神格の変遷を紹介するとともに、龍との関係から哪吒の治水神的面を論じてみたい。

哪吒という神格は、元々はインド神話に登場するナラクーバラという神である。彼は父親のクベーラと共に仏教に取り入れられ、父神の陪神「那羅鳩婆」と音写される。仏教に吸収されたクベーラ神は毘沙門天、または多聞天と称され、四天王や十二天の一角に数えられる北方の守護神となる。毘沙門天には最勝・独健・那吒・常見・善膩師²⁵らの太子がおり、上から三番目の那吒という太子が後の哪吒である。彼が中国に伝来したことを示す資料としては、『佛

所行讚』がある。

猶如天帝釋 諸天衆團遶 如摩醯首羅 忽生六面子 設種種衆具 供給及請福

今王生太子 設衆具亦然 毘沙門天王 生那羅鳩婆 一切諸天衆 皆悉大歡喜⁽²⁸⁾

ここでは、毘沙門天の下に那羅鳩婆が誕生したことを諸天衆が歓迎している様が描写されている。この他、唐代における哪吒像を示す資料としては唐代の資料、『太平廣記』⁽²⁹⁾九二卷、六一〇頁、無畏の条が挙げられる。

唐無畏三藏初自天竺至。(中略)連聲呼曰。律師律師。撲死佛子耶。宣律方知其異人也。整衣作禮而師事焉。宣律精苦之甚。常夜後行道。臨堦墜。忽覺有人捧承其足。宣顧視之。乃一少年也。宣遽問弟子何人。中夜在此。少年曰。某非常人。即毘沙門天子那吒太子也。以護法之故。擁護和尚⁽³⁰⁾。

この資料は、宣律という僧が階段から足を滑らせた際、毘沙門天の太子那吒を名乗る少年が救出したという説話である。ここで哪吒は、父神である毘沙門天から独立した、仏教の守護神としての立ち位置を確立していると考えられる。また、この資料によって唐代当時はまだ、哪吒という神格は仏教神と認識されていたということも窺える。この後宋代、元代になると他の神格との共闘が描写されるようになる。『脉望館鈔校本古今雜劇』⁽³¹⁾第八五「二郎神醉射鎖魔鏡」(元闕名撰)には、

那吒神与二郎飲酒比武藝一箭射破鎖魔寶鏡走了⁽³²⁾

那吒神領本部神兵⁽³³⁾

那吒神怒從心上起可早變化了神威頭着那三頭六臂⁽³⁴⁾

とある。鎖魔寶鏡とは作中で九首牛魔羅王、金睛百眼鬼を封じ込めていた三面鏡であり、これを那吒神と二郎神が酔った勢いにより弓矢で射ち、破損したことにより封じられていた妖怪が解放され、これを打倒することが、この「二郎神醉射鎖魔鏡」という作品の粗筋である。ここでは那吒が天の兵を統率できることや、その形態が三頭六臂として描かれていることが明示されている。また、ここでの哪吒は、娯楽としての雑劇の影響からか、単純な仏教神であるよ

り、むしろ戦闘に特化した武神であることが強調されており、後代見られる哪吒の性格への過渡期であると考えられる。これに続く明代に成立した『三教源流搜神大全』^③では彼は、大羅仙という仙人の生まれ変わりであり、托塔李天王的三男に生まれている。彼は生後五日に東海を騒がせ九匹の龍を殺傷した。彼はその咎により自害するも釈迦の助力により蓮の花弁を元に蘇生をする。甦った哪吒は諸々の魔王や赤猴をその神通力で下し、威靈顯赫大將軍という称号を得、天の門を守護することになったという扱いとなっている。以下に、『三教源流搜神大全』三二八頁にある哪吒の頁を引用してみたい。

那吒本是玉皇駕下大羅仙。身長六丈首帶金輪、三頭九眼八臂、吐青雲足踏盤石手持、法律大噉一聲雲降雨從、乾坤爍動。因世間多魔王、玉帝命降凡、以故托胎于托塔天王李靖母素知夫人。生下長子軍吒、次木吒、師三胎。那吒生五日化身浴於東海、腳踏水晶殿、翻身直上寶塔宮、龍王以踏殿故怒而索戰。帥時七日、即能戰、殺九龍。老龍無奈何而哀帝、帥知之、截戰于天門之下、而龍死焉。

(中略) 帥遂割肉刻骨還父、而抱真靈求全于世尊之側。世尊亦以其能降魔故、遂折荷菱為骨、藕為肉、系為脛、葉為衣而生之。

(中略) 故諸魔若牛魔王、獅子魔王、大象魔王、馬頭魔王、吞世界魔王、鬼子母魔王、九頭魔王、多利魔王、番天魔王、五百夜叉、七十二火鴉、盡為取降以至於擊赤猴、降孽龍蓋魔有盡而、帥之靈通廣大、變化無窮、故靈山會上以為通天太師、威靈顯赫大將軍。玉帝即封為三十六員第一總領使、天帥之領袖、永鎮天門也。^④

この説話では『太平廣記』の時代には持っていた護法神の性格は既に失われ、反対に「二郎神醉射鎖魔鏡」に見られる戦闘に特化した武神的性格がより際立っている。また、ここでの性質は後に続く『西遊』、『封神』に色濃く受け継がれる重要な説話を多く含んでいる。以下に、その部分を列記したい。^⑤

①前世の姿がある

②父は托塔李天王（毘沙門天）

③生後間もなく東海で暴れ、龍と争う

④父である人物と争い自害する

⑤蓮の化身として蘇生する

⑥三面六臂（八臂）の姿を取ることがある

等である。中でも、③の「生後間もなく東海で暴れ、龍と争う」という故事は特に有名で、「哪吒鬧海故事」として年画にもしばしば描かれている。³⁸このように、水の象徴である龍と争い、これを撃退したという説話から、「水」との関係が非常に深いと考えられる（図②を参照）。図②における哪吒は向かって左側で金輪を握り構えている人物であり、右側で龍に跨り槍を構えているのは東海龍王の皇太子である。ここに描かれている通り、哪吒という神格は「龍と敵対しこれを撃退する」神として民衆から崇められていた。ここまで、中国の各時代におけるの哪吒の扱いを見てきた。一方、現代中国においては、どのような取り扱いであるのかをここで確認しておきたい。「痞客部落格」³⁹や「瘋神的部落格」⁴⁰というサイトに哪吒の来歴、由来等が紹介されている。以下、その一部を引用してみた。「瘋神的部落格」
<http://blog.xuite.net/a168a76836/twblog> 46

三太子故事

太子爺，姓李名哪吒，生下來就身長六丈，頭戴金環，有三頭九眼八臂，（中略）哪吒七歲時，因天氣炎熱，帶幾個部屬到河邊沐浴，因哪吒身帶寶物，忽現奇瑞，起海嘯，振動龍宮，龍王大怒，派遣太子三人查看，乃與哪吒大戰。另一說哪吒有天入河沐浴，因身附神力，河浪大作，海嘯震盪，連海龍宮也為之蝦蟹不寧，龍王以為有人鬧東海，頗為發怒，就派遣龍王太子等，各持器，凶悍趕來，與哪吒衝突引發一場大戰。凱旋而歸，還抽了龍筋。為此得罪龍王，因而割肉還父，刮骨還母；而後魂魄脫軀飄到乾元山金光洞，為太乙真人先師所救，於金光洞中讓祂

以蓮花化身重生，重造骨肉。從此祂就昇天成神，他曾大戰東海龍王，降伏諸魔王，為民間所樂道，嘉其武勇，被尊為通俗道教中神兵神將的統帥。

ここに見られる哪吒像が、その多面多臂の容姿や東海龍王との対立、その死後蓮を媒介として復活する等の説話から、『三教源流搜神大全』に見られるものをそのまま踏襲していることがわかる。加えて特筆すべきは最後の「通俗道教中神兵神將的統帥」の一文である。元來仏教神である哪吒が、現代において通俗道教の神として信仰されている。その契機はやはり元代の頃より「二郎神醉射鎖魔鏡」等の雜劇に登場するようになったことに起因すると考えられる。それを契機として、後の『三教源流搜神大全』にその説話が収録されたことや『西遊』、『封神』等の神怪小説に登場し民衆に広く認知されたことで、哪吒に後付けされた「治水」や「道教神」といったイメージが、より確固たるものとなつていったのであると考えられる。

ここでは、哪吒が中国に流入した後、どのようにその神格を変化させていったのかを明確にした。まず唐代には既に毘沙門天の陪神から独立して仏法の守護として宣律を助けた逸話が残っており、宋・元代には雜劇に登場する。ここでの哪吒は守護神としてではなく武神としての性格が強調される。彼の説話充実し始めるのは元末から明代にかけてであると考えられるが、明代成立の『三教源流搜神大全』にそのほとんどが網羅されていると考えられ、そこには現代においても踏襲されている説話が明記されている。中でも、治水神として成立した契機である「哪吒鬧海故事」は非常に重要であると考えられ、現代の哪吒廟の由来を紹介するHPにも踏襲される形で語り継がれるものである。次の章ではこの治水神としての哪吒、前章で触れた降雨神としての李靖の廟の分布図を利用し、それらの職能と地理的傾向の関係、及びそれらと文学の関係を考察したい。

三 廟分布の比較

中国へ流入した当初は父である毘沙門天の陪神でしかなかった哪吒であるが、その後独立し武神、治水神としての側面を持つようになった。ここで、哪吒と水の関係の深さを明示するために今回、廟の位置情報を視覚的にわかり易くするため分布図を作成した。今回使用するのは『臺灣廟神大全』^②という台湾における廟の住所資料である。(図③、④、⑤を参照)。この地図の枠は山脈を、二重線は主要な河川(秀姑巒溪、大安溪、卑南溪、八掌溪、愛河、大漢溪、大甲溪、基隆河、淡水河、蘭陽溪、高屏溪、曾文溪、濁水溪、立霧溪、新店溪、花蓮溪等)を、二重円は湖沼を示している。図③の黒い点は哪吒を祀る廟を示した。これらは当時において人口の多い市街地、特に台中から台南にかけて、または海沿い、川沿いや湖沼の近辺にあることが特徴的である。

台湾への中国大陸からの入植は、非公認ではあったが福建省及び広東省出身者を中心に、十七世紀に活発化した。福建省泉州出身者は商業重視であったため台湾沿海部を、福建省漳州出身者は農業中心であったため平野部を、山岳地帯である広東出身者は故郷の地形に近い山地を各々選び移住したのである。その一方で原住民は住居を追われ段階的に山脈の北東へ移動していく。山脈地帯に廟が存在しないのはこのためである。なお許献平著「台南縣太子爺廟的分佈與系統」^④によると、台南への哪吒の分祀は一六六〇年代に新營太子宮から開始されている。この哪吒廟分布図と同様の手法で哪吒の父親である托塔李天王、李靖の分布図を作成した。

李靖廟に関しては、台湾においては皆無と言って良い(図④を参照)。この図において一ヶ所だけ該当する廟が新竹市に存在するが、この廟は関帝廟である。これはこの関帝廟に、李靖を併祀しているためこのように表記した。武神である関帝とともに祀る点では、この李靖は前述した歴代帝王廟(『明実録』洪武二十一年二月甲寅の条)^⑤においての祀られ方と同質のもので、武臣的扱いであり、宋代から見られる降雨神としての要素は見受けられない。これは、李靖神に降雨の属性が認められるのが、灌漑農業を行う関中平野を含む陝西地方のみであったことに起因する。農業

用水を確保する必要があつた灌漑農業地帯では、雨を降らせる神格が必要であつた。そのため李靖にその職能を付加し祈念したが、農法の異なる台湾においては降雨を祈願する必要性が弱く、李靖に対しては明王朝における公的祭祀を引き継いだ形となつたのである。

托塔李天王を祀る廟は四ヶ所ある（図⑤を参照）。台南地方に三カ所、台北地方に一ヶ所である。どちらも、市街地に面した位置である。民衆にとつて信仰が身近で、生活に浸透しているものと思われるが、絶対数が少ない。

三つの分布図をみると、地図上では李靖―哪吒の父子関係、または托塔李天王―哪吒の父子関係ともに設けられた場所が近い、併せ祀られている等の直接の関係はない。つまり、この二神を父子関係として捉えている廟は無いのである。これは、哪吒が父神とは完全に別れ、独立した信仰を集めていることを示すものと考えられる。

図③の哪吒廟に関しては、河川・湖沼の近辺に建てられていることが特徴的である。これは龍王撃退の故事から治水の英雄の側面を持つようになった哪吒を、「水」から人々を助ける治水の英雄であるとの信仰から水場の近くに廟を拓いたことを、地理的に示していると考えられる。また、台南・台中の河川中流域に哪吒廟を持ち込んだのが福建人であることから、農業を生活の基盤に据える漳州出身者や、商業中心の泉州出身者の信仰対象が哪吒であつたことが窺える。農業から見ても商業から見ても、天候や水運の安定が至上命題であるのは当然のことであり、その職能を持つ哪吒を入植の際に持ち込んだのである。この神格の他に水場の付近に開廟された水神は四川省灌江の付近に祀られている二郎神や黄河中流域の龍神などが挙げられる。ここまで、台湾での廟の分布図から、その職能と地理的傾向に関連性が認められることを論じた。また、李靖―哪吒の父子関係、または托塔李天王―哪吒の父子関係に、廟の地理関係はなく、台湾においてはこの李靖、托塔李天王、哪吒を信仰する場所は独立しているものと言える。これは、哪吒が既に父神から独立し、単体の神として祀られていること、また哪吒の方がより人気があり、その理由には治水の職能があることが言える。この治水説話は元末から明代に付加されたものと考えられるが、その契機は雑劇や文学作品であつたことを明示できたものと考ええる。

四 おわりに

李靖は毘沙門天と習合し托塔李天王とされていく一方、「李靖神」としての立場を確立していった。唐代、国土の防衛の職に就いていたが死後は民間では宋代以後、降雨の信仰対象とされ、雨を自在に降らせたという説話が付加された。このことから当時は降雨神として信仰を集めていたと考えられる。その後は雑劇の中で神仙に準じた扱いを受けるようになった。この場合の李靖神は托塔李天王や毘沙門天とは何の関係も習合も見られず、単立の神格であると考えられる。また、降雨説話や神術妙策説話に見られる神仙的要素が、明代に成立した『封神』にも反映・踏襲されていることを指摘できた。それは、李靖の「陳塘関の長官となる前は、仙人の修行をしていた」という設定に認められる。その一方、明王朝や台湾においては武臣として併祀されている。この場合の李靖には宋代から見られる降雨神としての要素は欠けてしまっている。恐らく、この降雨神としての性質は灌漑農業との結びつきが強く、中国の陝西地方では成立したが、その範囲が全国に広がることはなく、台湾においては、明王朝での武臣的扱いがより強く反映された結果であると言える。

また、哪吒という神格はまず唐代には既に毘沙門天の陪神から独立して仏法の守護として宣律を助けた逸話が残っており、その後宋・元代に次第に雑劇に登場するようになる。ここでの哪吒は守護神としてではなく武神としての性格が強調される。彼の説話が充実しただすのは元末から明代にかけてであると考えられるが、明代成立の『三教源流搜神大全』にそのほとんどが網羅されていると考えられ、それには、現代において踏襲されている説話が多数明記されている。中でも、治水神として成立した契機である「哪吒鬧海故事」は非常に重要であると考えられ、現代の哪吒廟の由来を紹介するHPにも踏襲されている。これらのことによつて、本来仏教神であるはずの哪吒が、現在では治水神・民間的道教神と考えられている理由の一端を明確にできた。また、本論において使用した廟の分布図からは、廟開設の地理的傾向と福建人の入植、及びそれらを繋ぐ雑劇・文学作品との関係を指摘した。これによれば、李靖―哪

吒の父子関係、または托塔李天王―哪吒の父子関係に、廟の地理的關係はなく、台湾においてはこの李靖、托塔李天王、哪吒を信仰する場所は独立しているものと言える。このことから、哪吒が既に父神から独立し、単体の神として祀られていること、また哪吒の方が、李靖や托塔天王より人気があり、その理由の一つに治水の職能があることが分かった。この治水説話は元末から明代にかけて、雑劇や文学作品を契機としたものであったことを明確にできたものと考えられる。

註

- (1) 『明清期における武神と神仙の発展』(二階堂善弘 関西大学出版部 二〇〇九) 五頁〜三九頁。
- (2) 「毘沙門天王父子与中国小説之關係」(柳存仁 『和風堂文集』 一九九九)。
- (3) 筆者が確認できた托塔天王李靖に関する先行研究は、「毘沙門天信仰の東漸に就て」(宮崎市定 『アジア研究第一』 一九六三)、「関于毘沙門天王等事」(徐梵澄 『世界宗教研究第四期』 一九八三)、「李靖・妙善故事之變異」(張瑞芬 『興大中文學報第五期』 一九九二)、「毘沙門天王父子与中国小説之關係」(柳存仁 『和風堂文集』 一九九九)、「哪吒太子考」(二階堂善弘 『明清期における武神と神仙の発展』 二〇〇九)であるが、いずれも毘沙門天の神格的変遷について言及しているが、人物としての李靖像には触れていない。
- (4) 註(3)と同じ。
- (5) 『旧唐書』八卷 列伝十七 (中華書局) 二四七五頁〜二四八二頁。
- (6) 『明清期における武神と神仙の発展』(二階堂善弘 関西大学出版部 二〇〇九) 二三頁に次のようにある。「李薬師」と「李夜叉」が容易に混淆されたであろうことは、すでに指摘されている。この両種の発音から見るに、この混淆は唐代に発生したであろうと考えられる」。
- (7) 『宋會要輯稿』(劉琳他編 上海古籍出版社 二〇一四)。

(8) 『宋會要輯稿』禮二〇 諸祠廟。

現代語訳すると次のようになる。「李靖の祠は、潞城縣に位置し、一一〇五年二月に廟額に「廣德」の文字を賜った。解縣においては、一一〇七年正月、「忠烈王」の位が贈られた。また、一一〇八年には「輔世惠烈王」の神号が贈られた。さらに後晉では「靈顯王」の神号が贈られた。一一〇七年十二月には、「普世忠烈王」と神号が改められた。」。

(9) 『關中勝蹟圖志』(畢沅撰 臺灣商務印書館 清)。

(10) 『關中勝蹟圖志』卷七。

現代語訳すると次のようになる。「李衛公の祠は、『通志』には三原県の役所の所在地の西に在る。唐代の李靖を祀っている。石碑には南宋、徳祐の初期(一二七五)に衛公に奉じられ、「輔世靈祐王」とされた。元朝には「忠顯威烈王」と名を加えられ、廟額には「仁濟」の文字を賜った。春と秋には祭りを行った。」。

(11) 『玉芝堂談薈』(徐應秋撰(四庫筆記小説叢書) 上海古籍出版社 一九九三)。

(12) 『元明事類鈔』(姚之駟撰(四庫筆記小説叢書) 上海古籍出版社 一九九三)。

(13) 『玉芝堂談薈』卷一九 天命行雨の項。

現代語訳すると次のようになる。「李靖が貧しい頃、山で狩りをし、日が暮れたので朱門に泊まった。夜中急に門を急ぎ叩く音がする。主婦が言うには「今降雨の天命が下ったが、手伝ってください」と。李靖は下僕に命じ、馬に馬具を付け、雨器を取り出させた。すなわち一小瓶である。そして(下僕を)戒めて言うには「この馬が鳴いたら、この瓶の水を馬のたてがみに滴せ。この一滴は地上の三尺となる。くれぐれも多くするな。」と。」。

(14) 『元明事類鈔』卷二〇。

現代語訳すると次のようになる。「安吉州に李衛公廟があり、宏治(弘治)年間(一四八八〜一四九二)の初め、旱害が起こり、呂令(知県)は神を輿に載せて雨を降らすように祈った。これに従って雨が降った。さらに後に

また早害が起こり、酷く熱かった。また神に祈ると、神像の額に珠のような汗が浮かび、これを拭いてもまた汗が浮かぶ。すると、また雨が降った。」。

(15) 註(9)に同じ。

(16) 『脉望館鈔校本古今雜劇』(古本戲曲叢刊編輯委員會編 一六一二—一六一七校定 東洋文庫所藏)。

(17) 『脉望館鈔校本古今雜劇』第一七〇 「唐李靖陰山破虜」(闕名撰) 八頁。

現代語訳すると次のようになる。「(その) 老人は姓名を李靖、字を葉師と言ひ、京師の地方長官を務める三原出身の人物である。」。

(18) 『脉望館鈔校本古今雜劇』第一七〇 「唐李靖陰山破虜」(闕名撰) 二八頁。

現代語訳すると次のようになる。「李靖軍師は天兵の勢力を統へ、神術・妙術を用いて北兵を殲滅した。」。

(19) 『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』(許仲琳編 明代 内閣文庫所藏) 卷三、一頁に次のようにある。「陳塘關有一總兵官姓李名靖。自幼訪道修真拜西崑崙度厄真人爲師學成五行遁術因仙道難成。故遣下山輔佐紂。」。

日本語訳すると次のようになる。「陳塘關には李靖という長官がいた。彼は幼少時から道学を修め西崑崙山の度厄真人に師事して、五行遁の術を学んだが仙人になれずいたために下山し紂王を輔佐するべく遣わされた。」。

(20) 註(11)に同じ。

(21) 註(12)に同じ。

(22) 註(16)に同じ。

(23) 『明実録』洪武二十一年二月甲寅。

現代語訳すると次のようになる。「詔によつて歴代の名臣を帝王廟に從祀した。これより先、礼官が上奏し、(中略) 太公望・方叔・召虎・張良・蕭何・曹參・周勃・鄧禹・諸葛亮・房玄齡・杜如晦・李靖・郭子儀・李晟・(中略) 岳飛・張浚・木華黎・博爾忽・博爾木・赤老温・伯顔、以上、三十七人を歴代帝王廟に從祀したいとした。」。

- (24) 毘沙門天の前身、インド神話に登場するクベーラ神にはナラクーバラという息子がおり、親子共々仏教に取り入れられた。
- (25) プラーナ文献に散見する、クベーラ神の息子。
- (26) または、禅尼只・独健・那吒・鳩跋羅・甘露とする説がある。
- (27) 『仏所行讚』（『大正新脩大藏經』本縁部第四冊）。
- (28) 現代語訳すると次のようになる。「諸々の天衆が天帝釋を囲んだように、摩醯首羅がたちまちに六面の子を生み、（これに対して）諸々の天衆は、種々の衆具を設け、供給し福を願ったように今、王が太子を産み、（天衆が）衆具を同様に設けた。毘沙門天が那羅鳩婆を生み、全ての天衆は大いに歓喜した。」。
- (29) 『太平廣記』九二卷（李昉等編 中華書局 一九六一）。
- (30) 現代語訳すると次のようになる。「唐の時代、無畏三藏が初めてインドから来訪した。（中略）（人の声が）連呼して、律師、律師。佛子を撲死させるのか、と言った。宣律はその呼び声の主が異人であると知り服装を整え、礼をして師事した。宣律は非常に精勵刻苦し、常に夜中に修行し、階段において足を滑らせ墜落してしまった。しかし突然人が現れ宣律の足を支えた。宣律がこれをよく見ると一人の少年であった。宣律は彼に、何者か、なぜこの深夜にここにいるのかを問うと少年はこう答えた。「私は普通の人間ではない。毘沙門天の子、那吒太子である。仏教を護るため、和尚を守護した。」。
- (31) 註(16)に同じ。
- (32) 『脉望館鈔校本古今雜劇』第八五 「二郎神醉射鎖魔鏡」（元闕名撰）九頁。
現代語訳すると次のようになる。「那吒神と二郎神は酒を飲み比べ、武芸を競ったために、その矢が鎖魔宝鏡を破壊してしまった。」。
- (33) 『脉望館鈔校本古今雜劇』第八五 「二郎神醉射鎖魔鏡」（元闕名撰）十三頁。

現代語訳すると次のようになる。「那吒神は本部の神兵を統率する。」。

(34) 『脉望館鈔校本古今雜劇』第八五「二郎神醉射鎖魔鏡」(元闕名撰)二四頁。

現代語訳すると次のようになる。「那吒は怒りに任せて変身すると三頭六臂の威容を顕わにした。」。

(35) 『三教源流搜神大全』(『藏外道書』影印収録 巴蜀書社 一九九二)三二八頁。

(36) 現代語訳すると次のようになる。「那吒とは玉皇駕下、大羅仙が本体である。身長は六丈、首に金輪をかけ、三頭九眼に八本の腕があり、青雲を吐いて足に盤石を踏み、手に法と律を持ち、大喝一声で雲を降ろして雨を従え、乾坤は爍動する。世間の多くは魔王とし、玉帝は命じて那吒は凡を下し、このことから托塔李天王の妻素知夫人に受托させた。生まれ下つてからは長子の軍吒、次の木吒、師(那吒)の三人の赤子となった。那吒は生後五日に化身して東海で水浴びし、脚は水晶殿を踏んで、体を直立させて寶塔宮に登り、龍王は那吒が殿を踏んだことに怒つて争つた。那吒は七日間、よく戦い、九匹の龍を殺した。龍王はどうしようもなく、このことは玉帝を哀しませ、那吒がこのことを知ると、天門の下で直接龍王と戦い、これを討ち倒してしまったのである。

(中略) 那吒は最終的に肉を割って骨を刻んで父に返却し、死霊の姿で釈迦の傍に拠つて復活する機会を求めた。世尊は、那吒が降魔の能力を持っていることよつて、蓮のがくを折つてそれを骨と見立て、蓮の根を筋肉と見立て、莖を脛と見立て、葉を衣服として那吒を生み出した。

(中略) 諸々の牛魔王、獅子魔王、大象魔王、馬頭魔王、吞世界魔王、鬼子母魔王、九頭魔王、多利魔王、番天魔王、五百夜叉、七十二火鴉、孽龍達魔物をことごとく降し赤い猿と戦った。那吒の神通力は広大で、変化は窮まるどころ無く、よつて靈山の上において天の太師と通じ、威靈大將軍として赫を顕わした。玉帝は那吒を三十六員の内で第一総領使とし、天帥の領主に封じ、これよつて那吒は永く天門を治めるようになった。」。

(37) 那吒説話の中でこの六つの部分を取り上げた理由は、明代に成立した『三教源流搜神大全』・『西遊』・『封神』の三つの作品に共通した部分であり、ひいては、中国人が強く意識し語り継いできた説話の要であるからである。

- (38) 『中国古典文学と挿画文化』（瀧本弘之・大塚秀高編 勉誠出版 二〇一四）七四頁。図②の哪吒鬧海年画は『国民間年画史図録（上）』（王樹村編 上海人民美術出版社 一九九一）一一四頁より。
- (39) 九龍太子紹介サイト「痞客邦部落格」（二〇一五年九月四日閲覧）。
<http://mygod0328.pixnet.net/blog/post/26076923-%E4%B9%9D%E9%8D%E5%A4%AA%E5%AD%90>
- (40) 中壇元帥三太子爺李哪吒紹介サイト「瘋神的部落格」（二〇一五年九月四日閲覧）。
<http://blog.xuite.net/a168a76836/twblog>
- (41) 日本語訳すると次のようになる。「太子爺とは、姓は李、名は哪吒。生まれてより身長六丈になり、頭に金環を頂き三つの頭に九つの眼、八つの腕を持つ。（中略）哪吒が七歳の頃、天気が良く暑いので幾人かの部下を連れて川岸まで沐浴へ出かけた。すると哪吒が身に着けた宝物が突然奇妙に光り、津波が起き龍宮が振動に煽られた。王は激怒し、太子三人を遣い原因を見に行かせた。そのため哪吒と龍王太子は大いに争った。一説によるとその日哪吒が沐浴すると身につけていた神通力によって大きな波が立ち、それによって龍宮も大きく揺らされたのだという。このため海の生物達は不安がり、龍王は東の海を騒がす人間がいることに大いに怒り、太子達を派遣したのである。派遣された龍王の太子達は各々武器を持ち凶暴な表情で急ぎ現場へ向かうと哪吒と遭遇し大いに戦った。これに勝った哪吒は凱旋の折り龍王太子の首筋を引き抜き持ち帰った。この咎を龍王に責められ、哪吒は肉を割いて父へ還し骨を割って母へ還した。その後魂魄は身体を抜け出て風に吹かれ、乾元山金光洞へ到着し、その仙人である太乙真人の所で救われた。太乙真人は金光洞の中で蓮花を使い、彼の生命や骨肉を生成した。彼はこれに従って神となって天に昇り、東海龍王と戦い諸々の魔王を調伏し、民衆のよく語る所となり、その武勇によって尊ばれ、通俗道教中において神兵・神將の統帥となった。」。
- (42) 『臺灣廟神大全』（仇徳哉編 楓林印刷設計企業社 一九八五）七六三頁〜七七五頁。今回、台湾を題材としたのは中国本土における廟よりも創設時期が遅いためその職能や時代的背景が追いつき、かつ資料が散逸していな

いため、取り扱いが容易であるためである。なおこの分布図は十年ごとの廟の分祀系統図を作成するためのモデルケースとして作成した。

- (43) 『図説 台湾の歴史』（濱島敦俊監修 平凡社 二〇〇七）六三頁～七七頁。
- (44) 「台南縣太子爺廟的分佈與系統」（許猷平 『第一屆哪吒學術研討會論文集』 新營太子宮管理員會主編 二〇〇三）六〇九頁～六三一頁。
- (45) 註(23)に同じ。



図①『三教源流搜神大全』三二七頁より那叱



図②『中国民間年画史図録（上）』一一四頁より哪吒鬧海年画



图③『台湾廟神大全』版哪吒廟分布图



図④『台湾廟神大全』版李靖廟分布図



図⑤『台湾廟神大全』版托塔李天王廟分布図